

日本最初の植物同好会、横浜植物会の果たした役割

たなかのりひさ
田中徳久 (学芸員)

横浜植物会は、1909年10月に設立された日本最初の植物同好会で、2009年、創立100周年を迎えました。設立当初より『牧野図鑑』で知られる牧野富太郎を指導者として、活動が続けて来ました。

創立と会規

会は、県立第一中学校の松野重太郎が中心となり、原虎之助、福島亀太郎、岡太郎、笠間忠一郎、鈴木長治郎が発起人となって創立されました。当時の資料はあまり残っていませんが、幹事などが変わったために1914年に印刷されたと思われる「大正三年五月改訂」と記された会規が現存します。そこには、講師：牧野富太郎、幹事：松野重太郎・和田治衛・原虎之助・八木原傳三郎、維持会員：佐伯四郎・久内清孝・清水藤太郎（幹事も併記）の名があり、事務所が丸善薬店（現横浜市中区弁天通）にあったことが分かります（その後馬車道の平安堂薬局に移動）。また、会規には「植物の研究を為すを目的とし…」と会の設立の目的が記され、幹事は維持会員から互選により選出されること、新しく会員になるには会員の紹介が必要なことなどが明記されています。一番興味深いのは会則の最後の「本規約に明文無きものは善意の解釈に依る」の一文でしょうか。現在の植物会の規約は1972年に新たに定められたものですが、それにもこの一文がそのまま残っています。

大正期の例会

図1の右端の^{またが}狛犬に跨る人物と図2に鎮座する人物、いたずら心を満喫しているのが会の講師をお願いしていた



図1 採集会のひとコマ（箱根芦ノ湖、大正時代）。写真提供 岡田 汪。

牧野富太郎です。著名な植物学者であつた牧野にも、こんな一面があつたのです。植物会の100周年を記念して刊行された『横浜植物会の歴史—創立100周年記念誌—』のために収集した古い写真には、牧野が写るものも多く、著名なために多くの写真が残っていることありますが、精力的に指導していたのが分かります。

また、当時の野外での例会は、会規の目的を達するため「講演会または採集会を催す」とあるように、植物の採集を目的とする“採集会”でした。図3は、1916年発行の植物研究雑誌（1巻79-80頁）に掲載されている1916年2月20日に催された定期採集会のひとコマと思われ、大船—今泉—本郷村—鎌倉建長寺のコースを歩き、本郷村でスハマソウを採集したようです。一番右が久内清孝、次が牧野富太郎、一番左が清水藤太郎で、清水が抱えている胴乱（採集した植物を入れる道具）にはミスミソウらしい植物が採集されているのが分かります。

植物学界への貢献

会員が採集した標本、あるいは生育地を案内して採集された標本を基準標本として、記載・命名された植物や献名されて学名に名を残す植物には、サガミドハギやハコネグミ、アシタカジャコウソウ、トウゴクミツバツツジ、タンザワヒゴタイ、ヨコハマダケ、ハコネランなどがあり、日本の植物相の解明に貢献しています。ここではその一部を紹介します。

サガミドハギ *Lespedeza hisauchii*

T.Nemoto & H.Ohashi

1999年に根本智行と大橋広好によりオオバメドハギ *Lespedeza davurica*



図2 牧野富太郎代理エンマ鎮座式（箱根大湧谷のエンマ堂、1926年9月1日）。澤田武太郎撮影。

(Laxm.) Schindl. などとされていた標本が再検討され新種として記載されたもので、久内清孝が1930年9月12日に平塚で採集した標本（図4）が基準標本とされています。現存するものは確認されていない、標本のみが残されている珍しい例で、当時、採集されることがなければ、この種自体が記載されることもなく、失われたことさえ気づかれなかったことになります。なお、記載の際には初山泰一が1930年9月20日に平塚で採集した標本や久内清孝が1933年9月7日に葉山で採集した標本も引用されています。

ハコネグミ *Elaeagnus matsunoana* Makino (図5)

1913年に牧野富太郎により記載されたもので、原記載には「私を採集地に案内し、この植物を採集した神奈川第一中学校の松野重太郎氏を記念して名づけた」（原著は欧文）とあります。



図3 採集会のひとコマ（鎌倉今泉山中、1916年2月20日と思われる）。写真提供 清水良夫。

印刷物にのみ掲載しています。

図4 サガミドハギの基準標本（東京大学総合研究博物館所蔵）。

アシタカジャコウソウ *Chelonopsis yagiharana* Hisauti & Matsuno (図6)

1918年に久内清孝と松野重太郎により記載されたもので、八木原傳三郎が1915年7月30日に精進湖で、松野重太郎・原虎之助が1917年7月29日に愛鷹山で採集した標本が引用され、八木原に献名され、学名に“yagihara”の名が残されています。

トウゴクミツバツツジ *Rhododendron wadanum* Makino

1917年に牧野富太郎により記載されたもので、標本は引用されていませんが、「横浜植物会会員の和田治衛を記念して名付ける」(原著は欧文)と書かれ、学名に“wada”の名が残されています。

地域植物相解明に果たした役割

神奈川県は、日本でもっともよく植物相が把握されている都道府県であると言われています。その所以として、1933年以来、5冊の植物誌・植物目録が刊行されていることが挙げられます。1933年発行の『神奈川県植物目録』は横浜植物会の発起人のひとりである松野重太郎が編纂しました。1958年発行の『神奈川県植物誌』の執筆者には、会の幹事や顧問の大谷茂、伊達健夫、浅井康宏らが顔を揃えています。同じく1958年発行『神奈川県植物目録』を表した宮代周輔も古くは会員で牧野富太郎に師



図5 ハコネグミ(西丹沢湯舟山, 1998年5月11日)。勝山輝男撮影。



図6 アシタカジャコウソウ(愛鷹山産, 横浜市内栽培, 1990年6月10日)。勝山輝男撮影。



図7『横浜の植物』。

事していました。

そして、関係諸団体、同好の士から高い評価を得た『神奈川県植物誌1988』のための調査は横浜植物会の発案で始まったもので、『神奈川県植物誌2001』の調査にあたっても協力しています。こうしてみると、神奈川県の植物相の解明に、横浜植物会が非常に大きな役割を果たしてきたことが分かります。さらに、2003年には『横浜の植物』(図7)を上梓し、『横浜植物誌』(出口, 1968)以来35年振りに横浜の植物相について詳細に報告しています。

また、日本全体でみても、横浜植物会のような同好会の存在が、地域の植物愛好家を育て、地域植物相の解明に大きな力を発揮しています。それには牧野富太郎をはじめとした指導者の方々の力が大きいのはもちろんですが、その先駆けとなった横浜植物会の存在は、大きなものと言えます。



図8 海外での観察会記念撮影(済州島漢拏山, 2006年6月12日)。



図9 こども植物園夏祭り(横浜市こども植物園 2009年8月8日)。堀川美哉撮影。



図10 横浜植物会100周年記念式典(横浜国際ホテル, 2009年10月25日)。中村雄二撮影。

最近の会の活動、啓蒙

近年の横浜植物会は、前項に記したような植物の研究も継続していますが、植物や自然保護に関する啓蒙にも力を注いでいます。野外における例会も“採集会”から“観察会”へと変わりました。観察会の開催地は、神奈川県内だけでなく、日本全国、1975年からは海外にも出かけています(図8)。海外の観察会は、植物の観察を目的とする植物会オリジナルの企画です。本誌Vol.7 No.4の「カンガルー・ポー」、Vol.10 No.3の「雲南の植物」、Vol.13 No.2の「漢拏山」は、この観察会の参加記事です。私も実は植物会の会員で、なかなか触れることのできない海外の植物を間近で観察する良い機会となっています。

この他にも、横浜市こども植物園の事業に協力している子供向けの講座などもあります(図9)。

100年間、さまざまな活動をしてきた横浜植物会ですが、2009年10月、100周年を迎えた式典を開催しました(図10)。

2010年、会は新たな100年の歴史を紡ぐべく活動を開始しています。(なお、文中、恐縮ですが、敬称を省略させていただきました)

自然科学のとり

第16巻4号(通巻63号)

2010年12月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 斎藤靖二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/>

編集 山下浩之

印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2010 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

R100

VEGETABLE
OIL INK